

東北紀行

Tohoku Travelogue

第 39 号 / 2021 年 6 月 / 編集：稲葉雅子(株)たびむすび/株ゆいネット)

三方良しの観光地域づくり

～人口 7 人 蛤浜の挑戦～

一般社団法人はまのね代表 亀山 貴一

宮城県石巻市の牡鹿半島の付け根にある蛤浜という集落での取り組みについて、この場を拠点に活動をしている「一般社団法人はまのね」の代表として報告する。

宮城県石巻市 蛤浜

蛤浜は宮城県石巻市の牡鹿半島にある小さな浜で、東日本大震災以前から 9 世帯しかない限界集落であった。2011 年の東日本大震災、津波の被害で、建物は高台の民家 4 軒と地域の集会所が残っただけであった。現在、3 世帯 7 人、うち 4 人が 60 代以上という状況である。地盤沈下による砂浜の消失、ニホンジカによる食害、山林の荒廃による土砂災害など課題の多い地域である。



上空からの蛤浜

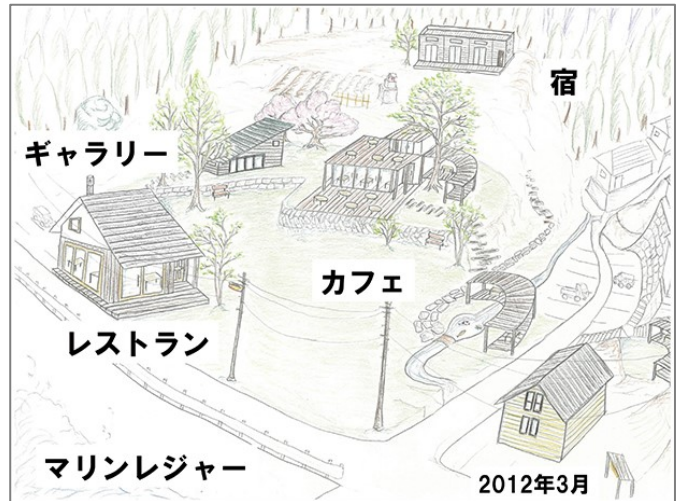
自己紹介

私は蛤浜で生まれ育ち、高校・大学と水産について学び、卒業後は水産高校の教師として 7 年勤めた。東日本大震災で家族を亡くし、「もうこの浜には住めない」と浜を離れたものの、1 年ほどして様子を見に来ると、人口は 2 世帯 5 人にまで減少していた。まだ瓦礫も残り、

JITR(Japan Institute of Tourism Research)-Tohoku 高台移転もできず集落解散という事態となった地域を見て、自分が経験してきた豊かな浜の暮らしを取り戻し、次の世代に伝えていかなくてはと考えた。以下、「蛤浜再生プロジェクト」、カフェ「はまぐり堂」、「一般社団法人はまのね」設立への展開の経緯をご紹介します、現状と今後の展望を述べる。

蛤浜再生プロジェクト

東日本大震災後、被災した浜の平地部分は災害危険区域と指定され、民家を再生することはできなくなった。定住は難しくとも交流人口は増加させられないかと、平地にカフェやレストラン、宿泊施設などをつくり、食やマリンスポーツを楽しんでもらおうと計画をした。この計画を「蛤浜再生プロジェクト」として 2012 年 3 月に立ち上げ「暮らし、産業、学びの 3 つを柱に持続可能な集落をつくる」を目的に活動を始めた。



プロジェクト立ち上げ時に描いた地域の未来図

交流人口の増加

しかし、計画実行には莫大な資金がかかる見込みで、資金調達に動いたものうまくいかなかった。そのため、高台に残った築約 100 年の古民家を、多くのボランティアの協力のもと改装することにして 2013 年にカフェ「はまぐり堂」をオープンした。地元の食材をつかったランチと店内からの眺望、震災復興に向けたストーリーへの共感などから、県内外から年間約 15,000 人、8 年間で約 10 万人が訪れる人気のスポットとなった。また、このカフェを拠点として、マリニアクティビティ、ツリーハウス、地元食材を使った BBQ など海と山の地域資源を活用した交流人口の拡大を図った。結果として個人やグループでの来訪だけでなく、企業からの協賛や企業研修による来訪も増えてきた。が、交流人口の増加は、必ずしも地域全体でハッピーとはならなかった。

交流人口から関係人口へ

人口が減少した集落に賑わいを取り戻すための交流人口拡大であったが、結果として想定以上の人数となり、翌 2014 年から蛤浜にとってはオーバーツーリズムとなっ

てしまった。駐車場から車があふれ、夜まで賑やかになったなど、交流人口の増加が地域住民にとって安心して穏やかに暮らせない状態を引き起こし、また、自分たちも忙しすぎて疲弊していった。「何のためにやっているのか」と原点に立ち戻って考え、「浜の暮らしと文化を伝えるのだ」「自分たちがワクワクすることをしていこう」と再認識した。そこで、カフェを予約制に切り替え、団体利用を制限し、不特定多数との交流から、特定少数との関係人口づくりにシフトチェンジをした。これにより、地元とのスピード感の差も縮まり、お客様に提供する食事も体験も丁寧で質の良い仕事ができるようになった。結果、地域の価値を正しく伝えることにつながっていった。（現在はコロナ禍でカフェ営業は曜日限定。）



シカの狩猟



自分たちで間伐

もある。そのため伐採などの山林の整備も自分たちで行い、間伐材を家具や食器、フローリング材などに加工して販売している。今後は、間伐だけでなく植林まで含めた体験につなげていきたい。また、山の担い手を増やすための林業スクールも実施している。

“三方よし”から“六方よし”へ

あらためて「売り手」「お客様」「地域・世間」の3方すべてが良くならないといけないと考えたが、現代ではSDGsの視点から「作り手」「地球」「未来」を含めた“六方よし”でなくてはならない。地方の衰退は「人の流出」「自然環境の破壊」「都市部への一極集中経済」が原因である。蛤浜は半径100メートル程度ですべてを見渡せるような地域であるから、あと20年くらい、森・里・海の循環をうまく続けていければ、とてもよい環境になると考えている。牡蠣の養殖には山からの栄養が必要であり、シカなどの問題も含め、きちんと生態系を守れるように取り組んでいきたい。そのためには、小さくても「良いもの」をつくりビジネスを生み出すべきであり、自分たちだけでなく首都圏の仲間にもお金が落ちるように農商工連携にも取り組んでいきたい。コロナ禍もあり、二拠点、都市と郡部など多拠点の考え方が増えてきているので、そのようなニーズにも応えられるようゆっくり滞在できるタイニーハウス（小さな家）なども準備して人の循環をつくりたいと考えている。

地域課題の解決に向けて

徐々に自分たちの実績が認められ、4年間の助成金が決まったため、その資金を地域課題解決に対して充ててきた。一点目は地盤沈下により砂浜がなくなった蛤浜の活用、マリニアクティビティへの取り組みである。二点目はシカの問題である。現在、地域住民の何倍もの数のニホンジカが生息しており、作物への被害も大きい。シカの駆除には税金が使われているが、人数が増えないまま高齢化した猟師の力では追いつかず、また、獲物のシカの肉や皮はただ廃棄されていた。この課題をビジネスの手段で解決するために、自分たちも狩猟免許をとり解体施設をつくり、六次産業化による商品づくりや体験型ワークショップを実施している。このような活動は、シカを通じた生態系の学びの場となり、また東京から狩猟免許を取った活動協力者が通うという新たな形の交流人口増加にもつながっている。三点目は山である。せっかく祖先が残してくれた山が荒廃して災害の原因になること

漁業資源と生活基盤

このような取り組みをしながら、普段、海で漁をしていると、ここ数年魚が獲れなくなったと感じている。無理に獲ると自然資源を減らすことになるため、どうやって資源を守りながら、生活を成り立たせていくべきなのかを考えた。まず、流通経路を見直し、通常は廃棄してしまうものを工夫して売り物にすることで利益を上げたり、自店のカフェで提供しメニューのオリジナリティ向上につなげたりしてきている。

今後取り組んでいきたいこと

今後取り組んでいきたいことは、多くの人に、この浜を訪れてもらい何かを学び・体験してもらい、そして水産の現場を知ってもらうことである。アイデアは多数ある。少人数でも成り立つプロボノメニューの開発、石巻市内の施設と組み合わせたワーケーションや学生向けのスタ[ディ]ケーションの実施、暮らしそのものをシェアするライフシェアなどである。

震災から10年、年々ボランティア人数も減少、コロナ禍もあり、改めて自分たちの立ち位置を考え直す時期であると考えている。関わる人がお互いに共有できるものをつくり、交流人口から関係人口の増加に取り組んでいきたい。しかし、これまでとは異なる「関係」づくりが必要だ。地域のを消費してもらう関係ではなく、地域の価値を一緒に創造していく関係だ。住民にはなれないが、各々が関わりやすいスタンスで蛤浜にかかわる。蛤浜には「ない」ものが多い分、不足を補う「関わりしろ」が多い。ボランティアでも体験でもない、お金を出して地域づくりにかかわるツーリズム、通常の旅行では味わえない、地域づくりや環境問題を考えるツーリズムである。蛤浜に多い課題の解決が目的となる創造の旅だ。消費ではなく、生産、創造したい人が、地域と一緒に課題を解決して地域をつくっていく、「クリエイティブツーリズム」に取り組んでいきたい。

*5月8日の東北支部研究会講演（遠隔方式）の要約